巨大防潮堤 本当に必要か

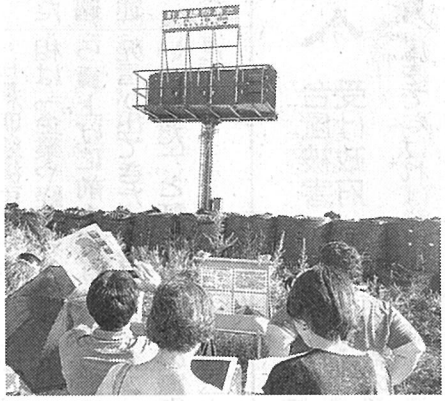
ＮＰＯ法人
ＪＫＳＫ理事
大和田順子さん

東北復興日記 62

「ここが14・7メートル。巨大防潮堤計画」。ビルを見上げると、四階の天井あたりにサインが掲げられていました。九月一日に日本自然保護協会が開催した「防潮堤まつりｉｎ東京　東日本大震災と防潮堤計画。未来の海辺になにを残すか」というシンポジウムの会場です。

大震災から二年半が過ぎ、復興地の沿岸部で最大高さ一四・七㍍、総延長約三百七十㌔㍍の巨大防潮堤の計画が進み、一部では工事が始まっています。

このことが頭から離れなくなってしまい、同じ思いを持つメンバーとシンポジウムに参加し、気仙沼などで建設予定地を見て、関係者の声を聞いてきました＝写真。



必ずしも住民の合意が十分得られず、景観や生態系、漁業への配慮も十分検討されないまま、二〇一五年度末までに建設を完了しないと国からお金が下りないという切迫感の中、工事は始まっていると聞きました。

市町村の首長は「県の事業だから私たちには何もできない」、国は「市町村や県の要望に私たちは予算を付けている」と言います。そして住民は「生活再建や目の前のことで手いっぱいだし、防潮堤のことは私たちにはどうしようもできない」と言います。

巨大防潮堤は本当に必要なのでしょうか、十年後、五十年後、百年後まで修繕にどれくらいの税金が必要なのでしょうか。景観や生態系に少しでも配慮したものにできないのでしょうか。

あらためて防潮堤の計画と現状を知るとともに、美しく豊かで命を大切にする暮らし・社会について考える機会として「東北の美しい未来を考えるフォーラム」を企画しました。十月三十一日午後五時から。衆議院第一議員会館多目的ホールです。

問い合わせはメールseawall1031@gmail.comまたは電話03（3225）2307。

この連載は、東京のＮＰＯ法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。